
遥か彼方

犬人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙か彼方

【Nコード】

N2424B

【作者名】

犬人

【あらすじ】

ある日、ユウは少女に一目惚れしてしまう。そして付き合うことになった二人を待っていたもの。それは辛い現実だった…

始まり

少し埃っぽい教室の中、少年は窓の外を眺めていた。

「ユウいい加減告っちゃえよ。お前ら仲いいじゃん。絶対大丈夫だつて!」

いや正確には、少年は窓際で談笑している少女達に目を向けていた。

段々と教室は、登校してきた同級生達で賑わってくる。

そんな中、ユウは決心した。

「よし…わかった。今日言つよ。」

目の前に座っている少年…ヨシキの喜んでいる声を聞きながら、その少女に再び視線を戻すと、

少女はその大きな目を細めて、楽しそうに笑っていた。

放課後。

少女に『話があるから、屋上に来て』とメールを送る。

いよいよだ…

緊張が高まっていく。

抑えようとすればするほど、ユウの心臓は高鳴り、音が体内に響き渡る。

（落ち着け…落ち着け…）

焦りながらも、時間は確実に過ぎていく。

そして少女は…来た。

「ごめん、遅れて。えっと…話って…なに？」

少しの間を置いて、ユウは途切れながらも言葉を紡いでゆく。

「えっと、話って…いうのは…」

あと一歩、たった一歩が中々踏み出すことができない。

少女はユウを見ながら、何も言わずに黙って待っている。

（もう…どうにでもなれ！）

「俺、ハルのことが好きです！付き合ってください！」

空にユウの声が反響し、やがて吸い込まれていった。

そして一瞬、時間が止まったように屋上を静けさが襲う。

「私も……私もユウが好き。」

だが次にユウが耳にしたのは、少し赤面したハルの至福の言葉だった。

「こちらこそ、よろしくお願いします！」

そしてハルは、嬉しそうに笑った。

その日、二人は初めて一緒に帰った。

繋いだ手のひらは、

笑顔の二人を固く結んでいた。

秋空

ユウが告白した翌日、二人が付き合い始めたことは、瞬く間にクラス中に知れ渡った。

「ユウ！良かったじゃんか！」

ヨシキが満面の笑みでユウのもとへと歩を進める。

「サンキュー！色々ありがとうなヨシキ。」

ユウはハルについて、ヨシキに色々と相談をしていた。

ある日、どうやって告白するかについて相談すると、ヨシキは少し考えた素振りを見せた後、こう言った。

「そういう時はな、相手の目を見て、目玉焼きみたいで旨そうだなーなんて考えるんだよ。」

「なんだそれ！？ったく、真剣な顔で何を言うかと思ったら…」

「これでバッチグー」

「どこがバッチグーなん！？ちゃんとしたアドバイスをくれよ！」

「例えば、ユウの目を見て美味しそうだなーって。」

「それはもういいっての！」

全然アドバイスになってないが、ユウはヨシキと話していると、

いつの間にか告白の不安や焦りは薄れ、リラックスすることができた。

ユウにとってヨシキは、かけがえのない存在だった。

「ユウ！告ったんだって！？」

「あー俺も気になってたんだけどなー」

「お前じゃ無理やって！」

いつの間にか、ユウの周りは、話を聞いた同級生達が集まってきて、賑わいを見せていた。そんな中、ふとハルのことが気になって、窓際に視線を移すと、

ハルはユウと同じように大勢の人に囲まれて、告白した時のように

頬を赤らめ、幸せそうに微笑んでいた。

それを見たユウは、心が満たされていくのがわかった。

ハルが嬉しそうにしているのを見ると、つい頬が緩んでしまう。

「なーに、にやけてんだよ！」

再び周囲が騒がしくなる。ヨシキ達にこづかれながら、ユウもまた、幸せを噛み締めていた。

それから数日後、学校も終わり二人は駅へと続く道を歩いていた。

付き合ってから、毎日二人は一緒に帰っている。

いつものように駅前の繁華街を通っていると、ユウの目にファーストフード店の看板が飛び込んできた。

「まだ時間あるし、ちょっと寄らない？」

するとハルは足を止め、ユウの顔をしげしげと見る。

「…もしかして…デートのお誘いかな？」

予想だになかった言葉に、何故かユウは恥ずかしくなった。

「いや違っ…」

「え、違うの？」

気まずい間が流れる。

「…うん、そうだよ。」

それに耐えかねて、ユウはやつとの思いで口を開いた。

「それじゃあ断ったら失礼だね。うんいいよ、行こう！」

途端にハルは元気になると、ユウを急かすように店の方へと向かって行った。

店に入ると、中は学校帰りの学生達で賑わっていた。

二人は適当に食べ物を注文して、奥にあるテーブルの椅子に、向か

い合うようにして座った。

「そっといえば来月誕生日なんだよね。」

早速フライドポテトに手を伸ばしつつ、ハルはユウに尋ねた。

「ん…あれ、言ってたっけ？」

ユウは今までのハルとの会話や、やり取りしたメールを思い浮かべる。

だがやはり、言った記憶はない。

「うっん、ユウ自己紹介の時にさ、誕生日言ったよね？確か…11月3日。」

「…ああ、あの時か！」

あれは4月、入学式の翌日のことだった。

新人生お決まりの自己紹介の時、ユウは何を言おうか迷っていた。

そして決まらないまま、ついに自分の番が回ってきてしまい、

仕方なしに、名前と何故か誕生日を言ったのだった。

よく憶えていたもんだと、ユウは嬉しいような感心したような気持ちになった。

「よくそんなこと憶えていたな…」

「いや、うん、まあ…ね。」

言葉を濁すハルに疑問を抱きながらも、あえてユウは突っ込まないことにした。

ハルの美味しそうにポテトを頬張る姿を見ると、そんなことはどうでもよく思えた。

「美味しい？」

「え？」

「ポテト」

「うん！ユウも食べる？」

そう言うと、フライドポテトの詰まった紙の容器をユウに向ける。

ユウはその中の一つを取り出すと、口の中に放り込んだ。

ホクホクしたじゃがいもの甘みと、塩のしょっぱさが口いっぱいに広がる。

「美味しい？」

今度はアイスティーに手を伸ばしつつ、ユウに尋ねる。

「うん、美味しい。」

するとハルは、嬉しそうに笑った。

しばらくして店を出ると、再び駅に向けて歩き出した。

すでに日は落ちかけており、少し肌寒いのに身を震わせた。

それがより一層、二人に冬の到来を予感させる。

そんな中ハルと繋いだ手は、素敵に温かった。

どんな時でもユウの隣には、いつもハルの笑顔が咲いていた。

プレゼント（前書き）

携帯電話から見やすいように、改行多めとなっておりますが、ご了承ください。

プレゼント

時は進み、12月も半分過ぎたある日の休日、

ユウは自宅から二つ駅を乗り継いで、とあるデパートを訪れていた。

店内に一步入ると、華やかに飾られたツリーやリースが所々に置いてあり、クリスマスの再来を実感させる。

ユウはそれを目にしつつ、上の階を目指してエスカレーターに乗った。

ちなみに行き先は3階のランジェリーショップ。

そう、今日はハルへのクリスマスプレゼントを買いに来たのだ。

エスカレーターに運ばれて、無事に目的地に着いたが、お客さんは女性やカップルがほとんどで、男は1、2人程度しかない。

（みんなプレゼントを買いに来たのかな）

なんてことを考えながら、飾られてある装飾品を順番にチェックしていく。

どれがハルに似合うかなあと悩んでいると、他より一際大きなガラスケースがユウの目についた。

（うわぁ、すげえ……）

そのガラスケースからは美しい光が飛び交い、放たれる神々しい輝きは、他の宝石を圧倒していた。

その中で、良さげなネックレスを1つ見つけて、値段の書いてあるタグに目を向ける。

（……こっちもすげえ）

いくらか貯えはあったのだが、到底ユウには手が届かない代物だった。

「いらっしやいませ。プレゼントをお探しですか？」

戸惑っているユウを見かねたのか、一人の店員が声をかけてきた。

「あ、はい。彼女になんですけど……」

「予算はおいくらでしょうか？」

「えっと…大体1万位です」

幾つか質問に答えると、店員は左隅にあるスペースへ案内した。

そこには、さっきのガラスケース程の輝きは無かったが、女の子が好むような可愛いらしいアクセサリーが並んでいた。

「これなんかはオシャレで、女の子に人気ですねー」

などと、店員に様々なネックレスや指輪を勧められ、少し助言をもらい、悩んだ挙句…

ペアネックレスを買うことにした。

普段はイルカを模したネックレスだが、

「これを二つくっつけると……」

二匹のイルカは見事に合わさって、ハートの形へ姿を変えた。

「これにします。」

それを見た瞬間、ユウは即決した。

代金を払い、クリスマス用にラッピングされた箱を受けとりながら、ユウはわくわくしていた。

ハルは喜んでくれるだろうか。
喜んでくれたら、いいな。

同時刻。

ユウがネックレスを買ったちょうどその頃――

ハルは親友であり、幼なじみでもある由美と一緒に、駅前に新しく出来た雑貨店にやってきた。

もちろん、ユウへのクリスマスプレゼントを買うために。

棚の中で所狭しに並んでいるアクセサリーを一つ一つ眺めていると、由美がポンポンとハルの肩を叩いた。

何だろうと後ろを見ると、

「これ何かどう??ユウ君のイメージにピッタリじゃない!??」

そう言いながら、ハルにクマのぬいぐるみを見せびらかす。

手に握られたぬいぐるみは、どうだ、とても言いたげな誇らしい表情をしていた。

「うーん…ユウには可愛すぎない?」

「そうかなあ??似合うと思うけどな…」

泣きながらも、由美はぬいぐるみを棚に戻す。

その後も由美と一緒に店内を回ったが、中々これだと思えるような代物に出会えずにいた。

「ユウ君はどんなのが好きなの??クリスマスプレゼントっていつでも、範囲が広すぎて決ままないよ。」

「ユウの好きなもの…」

何があったっけ…

ユウの表情や言葉が浮かんでは消え、浮かんでは消え、を繰り返す。

『一緒に帰る』

『この前の誕生日ありがとうな』

『へえ……ハルって甘いもの好きなんだ』

『おはよ。すっかり寒くなったね』

……そうだ！

「由美」

「え、何？」

気に入ったのか、さっきのクマを夢中でいじくっていた由美は、突然呼ばれたことに少し驚いた。

「私…マフラー編んでみようかな」

「へ？ハル編み物やったことあるの？？」

「ううん。ない」

「はあ！？クリスマスまでもう10日も残って無いよ？？」

わかってる。でも…

「大丈夫、頑張って間に合わせる」

それを聞いた由美は、ただ苦笑するばかりだった。

その後由美と別れたハルは、編み物の道具一式を購入して、帰路についた。

そしてその日から、毛糸との格闘が始まる。

毎日夜鍋をして、絡まる毛糸に苦虫を噛む思いをしながらも、着々とそれを完成に近づけていった。

期待と別れ

クリスマス。

またの名を聖夜、キリストの誕生日。

恋人達が巡り逢う夜…

小さい頃、俺はサンタがいると信じていた。

クリスマスイブの夜には、サンタへの手紙を書いて、枕元に置いてから寝た。

その中身は『サンタさんご苦労様』から始まって、『〜が欲しい』で終わる、今の自分から見れば夢が溢れんばかりに詰まった内容だった。

そして朝を迎え、目が覚めるといつの間にか手紙はなくなっていた。

その代わり、『ユウ君へ、サンタより』と書かれた紙と、キレイに包装された箱がチョココンと置いてあった。

そのことに幼かった自分が、ものすごく喜んでいたのを憶えている。

毎年クリスマスの季節になると、俺は必ず手紙を書いた。

そして、サンタからのプレゼントに飛び跳ねた。

けどその年は違った。

ふと好奇心から、サンタを一度でいいから見てみたいと思ったんだ。

クリスマススイブ当日。夜になり、傍らに手紙を置いて布団に潜り込む。

毛布の優しい温もりに、何度も寝そうになるのを耐えながら、その時を待った。

そして真夜中

彼はやって来た。

ドアをゆっくりと開けて、俺が寝ているはずの布団にそーっと近付いてくる。

——今考えると、何でこんなに必死でサンタに会いたいと願ったのだろうか。

俺は気付かれないように、ほんの少し目を開くと

そこに居たのは——

「メリークリスマス、ユウ君」

そのなんとも言えない煙草くさい匂い、その存在感ある雰囲気、その聞きなれた少ししゃがれた声。

——親父だ

しばらく俺の顔を眺めた後、親父は部屋を出ていった。

明かりを点けて布団を見ると、あつたはずの手紙は消えて、そこには当然のようにプレゼントと例の紙が置いてある。

『やっぱりな』と俺は思った。

幼いとはいえ、来年には小学校に入学する。

勿論、周りの友達ほとんどが『サンタさんなんていないよー』と言っていた。

正直、気づいていた。

サンタなんていない、それが当たり前——

その日を境に俺は少しずつ、冷静に“現実”を見れるようになっていった。

そして今日

俺は16回目のクリスマスイブを迎えた。

少し薄暗い部屋の中、妙に肌寒い感触を覚えて、突然目が覚めた。

見ると布団に包っていたはずの上半身が、凍える空気の中へと放り出されている。

おそらく、寝ぼけて布団を蹴りとばしたのか、もしくは自分から抜け出したかのどっちだろう。

出てきた鼻水をすすりながら、置いてあったケータイを開く。

12月24日(日) Am 8:34

それを確認すると、嫌がる体をむりやり起こして一階に降りた。

居間に入ると、そこには当前のように静けさが待っていた。

親父は出張中、お袋と兄貴は……まだ寝ているだろう。

せつかくの休み、わざわざお袋を起こすほどでもない。

とりあえずお腹が減っていたのでパンをトースターで焼く。

その間にフライパンで目玉焼きをつくり、焼きあがったトーストの上に乗せる。

そしてコップに牛乳を注げば、わずか5分で簡単な朝食の出来上がりだ。

早速トーストを頬張りつつテレビをつけると、やたら化粧の厚い女子アナがニュースを読んでいた。

『…ですので今年は例年稀に見る大雪になると…』

（大雪……かあ）

窓越しに外を見ると、そこには一面の銀世界が広がっていた

けど広がっているだけ。

（雪、降ってないなあ……）

しばらくの間その光景をとり憑かれたように見ていたが、やがてハッと思い出したように再び口を動かし始める。

朝食を食べ終わると、まず部屋に戻って履き慣れたジーンズとTシャツに着替え、その上に厚手のジャケットを羽織る。

次に洗面所で身だしなみを整えて、香水をワンプッシュ。ちなみにこの香水は俺の誕生日にハルがくれた物だ。

時計を見る。時間は…大丈夫、余裕で間に合う。

「行ってきます」

プレゼントが入ったバッグを持って、俺は家を出た。

待ち合わせは

A m 1 1 : 0 0 駅前にある『喫茶おらんだ』にて――

* * * * *

「いらっやいませ、お一人様ですか？」

店内を軽く見渡すが、ハルの姿はない。

張り切って約束の時間より40分も早く来たのだから、まあ当然な
んだけど。

「後からもう一人来るんですけど」

「ではこちらへどうぞ。」

そう言うウエイターは奥にあるテーブルへ案内した。

俺は椅子に座り、とりあえずアップルジュースを注文する。

ちなみにコーヒ―は無理。あんな苦いものをどうして人は好むのか。
小さい頃、疑問に思っていたがそれは今でも変わらない。

ウェイターは『少々お待ちください』と言うと、店の奥に入っていた。

* * * * *

グラスの中の氷は溶けて、底に水が溜まってきた。

現在の時刻は10:49。

ハルは待ち合わせにはいつも10分程はやく来る。
そろそろ声が聞けるだろう。
俺の名前を呼ぶ声が。

その時店内には音楽が流れていた。
某歌手の甘ったるいクリスマスバラード。

とめどなく溢れるメロディーが、突然ケータイの着信音によって切り裂かれた。

（危ね……マナーモードにしとくの忘れてた）

少し電話越しの相手に感謝した。ハルと話しているときに鳴ったら、

正直まずい。

さて、誰からだろうと思ってディスプレイを映す。
名前が書いてあった。

《ハル》

「え……」

思わず声を漏らしてしまった。
何で？まさか来れなくなったとか？

不安を抱きながら、通話ボタンを押した。

「ハル……？」

「あっユウ、えっと……ごめん」

彼女の声は心なしか慌てていた。

「待ってたよね？本当にごめんね実は寝坊しちゃって」

とりあえず最悪の結果は免れたらしい。しかしハルが寝坊だなんて
珍しいな。

「珍しいなハルが寝坊だなんて。何かに夢中で寝れなかった？」

「え、ユウってもしかしてエスパ―？」

はい？

「なんで？」

「ん、いや何でもない。」

「そう？」

「うん。本当にごめんね？30分には着くから」

あと30分。たったこれだけの時間で君に会える。

でもきつと彼女は、20分には俺の目の前で笑顔を見せているだろう

屈託のない、笑顔を。

会話を終えて、ケータイを閉じる。いつの間にか流れている曲は変わっていた。熱い、コーヒーみたいなメロディー。

恋人たちの声は止まることを知らない。

喧騒の渦中でグラスの氷がカラン、と音を立てた。

ハルの声を聞いたのはこれが最後だった。

17歳の冬の出来事だった。

夢中喪服

——おいユウ、落ち着いて聞けよ

なんだよ……そんなに慌てて

——昨日な、すげえ雪積もってたろ

ああそうだな。それよりハルは？昨日から見てないんだけど

——それで……タイヤがスリップして

そんなことどうでもいいだろ？頼むから真剣に答えてよ

——それでハルは……

だからハルは……

ハルは……

どこ？

僧侶が会場に入ってきた。皆は黙礼をする。当然、俺も。

僧侶はゆっくりと、一歩一歩祭壇に近づいていき——座った。

その口からお経が紡がれていく。
感情のない声を淡々と繰り返す。

周りからすすり泣く音がポツリ、ポツリと出始めた。

遺族側からは声を出して泣く人も。

ナンデナイテルノ？

ハルはいるんだよ。あの棺の中に。

きつと今に開くさ。

そして、そして……何て言うんだろ？

『帰って来ちゃった』とか……？

いや、『心配かけてごめん』かな？

ハルは謝ってばかりだな。そんなに自分を責めなくてもいいよ。
俺はハルと一緒になら、それでいいんだ。

だから

寝坊して遅刻しても俺は怒らないし、嫌いにもならない。

何でハルはいないの？俺のこと嫌いになった？

ちょっと……いやかなり淋しいけど、でも俺は諦めない。

絶対にハルを呼び戻すから。

……そうだ、ハルに渡したい物があるんだ。

ハル動物好きだったろ？ネックレス買ったんだ結構高かったんだぜ？

（優しい娘だったね）

（交通事故だって）

（何それ……許せない）

ヒソヒソと話し声が聞こえる。

俺に向けられる視線。

痛いほどの気遣い。

爆発物を扱うような会話。

それが嫌でも俺に突き刺さり、心の中心をえぐる。

そして引き戻されるんだ。“現実”に。

知ってるよ。わかってたさ。

ハルはもういない。

何度も考えてしまうんだ。今はいいだけ、そのうち帰って来る……って

考えずにはいられないんだ。

* * * * *

ここはどこだ？

気がつくと思慣れない部屋にいた。

天井には窓がついている。そこから降り注ぐ月光に不思議な感覚を憶えた。

第三者から見ればさぞかし神秘的な光景なのだろうけど、どこか馴染めない。

それにしても変な部屋だ

扉がない。

どうやって外に出るのだろうか。

右から左へと現れる疑問。悩んでいると、音が聞こえた。

図上から。

「メリークリスマス」

見上げるとそこには、白い玉のついた帽子に真つ赤な衣装。
その服と同じくらい真つ赤な顔に白く長い顎髭あごひげ
背負っているのは巨大な布袋。

「プレゼントを持ってきたよ」

それは俺の想像している、サンタクロースその人だった。

「サンタ……クローズ？」

そうさ。君の為に遠い国からやって来たんだよ」

「そっか、やっぱりサンタはいたんだ……」

この場面を、保育園の皆に見せてやりたい。

スグルやマナブの顔が浮かぶ。ほら見る。サンタクローズがここにいるぞ。

「そうそう、さっきも言っただけどユウ君にプレゼントを持ってきたよ」

「プレゼント？」

「ああ……はい、プレゼント」

布袋から小さい長方形の、きらびやかに包装された箱を取り出して、俺に渡した。

中身はネックレスだった

ハルにあげるはずだった、ハートの片割れ。

「彼女から頼まれたんだよ。君に返して欲しいってね。

伝言も預かっている。私のことは忘れて幸せになってください……
だとさ」

ナニッテルノ？

「嘘だ」

「嘘じゃない」

彼は冷静だった。

……彼は本当にサンタクロースなのだろうか。いや、違う。違うに決まっている。

「残念ながら、私は本物だ」

俺の心を見透かしたように彼は告げた。

「それなら……ハルを連れてきてよ。本物のサンタクロースなんだろう」

声が震える。何でだろう。寒くもないのに。

「それはできない」

「できない？ 貴方は子供達に夢を運んでいるんだろ？」

彼を皮肉る。何でだろう。憧れだったはずなのに。

「ああそうだ。でも君には無理だ。なぜなら」

なぜなら？

「君は大人じゃないか」

ああそうだった。俺はもう昔の、純粹で、夢見がちな子供じゃない。

「わかったかい。君には無理なんだ」

わかったよ。これが夢だということも。

俺はハルにネックレスなんて渡していない。渡す前に彼女は消えたんだ。俺の前から。

「そう、これは夢なんだよ」

嫌な夢だな……

何で貴方はここに來たの。

「言っただろう。彼女に頼まれたって」

頼まれたって、さっきのあれか。

ふざけんな。

俺はハルがいればいいんだ。

ハルが隣で笑っていればいいんだ。

あの笑顔が好きだったんだ。

でも今じゃ写真でしかそれを見れない。

ふざけんなよ。

サンタクロースなら彼女を返せよ。

それが無理ならサンタなんていなくていいから。
神様もいないから。
世界中の皆も消えていいから。

「ハルを返してよ……」

告別式の翌日。目覚めは最悪だった。

* * * * *

年も開けて、学校が始まっても俺の心は晴れなかった。

みんな、何がそんなに楽しいんだ？

修学旅行だって？

へえ、よかったじゃん。

いつものように教室に入って、授業を受けて、昼飯食って、また授業。
業。

こんな流れ作業の毎日で、何が楽しい？何がおかしい？

……俺自身つまらないと感じながらここに来るのは、未だにハルを引きずっているからなのだろうか。

もしかするとハルがいるかも……ってね。

我ながら呆れるよ。

でも、これでいいって思っている自分がいる。

遠く、遙か彼方に行った彼女を身近に感じれる唯一の方法だから。

単なる現実拒否だけど、やめられない

どうしてもだめなんだ。

そんな抜け殻のように生きていたある日

それは由美の一言がきっかけだった。

「ハルの両親が逢いたいって」

「誰に？」

「誰って……決まってるじゃん」

俺に、か。

「ハルのお父さんがね、最後に娘と付き合った男を見てみたいって行くよね？」

「ん…わかった」

「殴られたらどうする？お前みたいな男と！みたいな」

「行くよ」

行かないわけがない。だって俺は――

「ハルの彼氏だから」

行かなかったら、俺とハルの接点がなくなってしまうから。

* * * * *

週末に俺と由美は再びハルの家を訪れた。

天気は快晴。

ここに来るのはあの日以来だ。

橋を渡り、公園を過ぎた所にハルの家がある。

彼女の軌跡が残る場所が。

「もっと早くに来れば良かったな……」

浮かぶのは後悔の念。

それを聞いた由美は悲しそうな表情をしていた。

インターホンを押すとハルの両親が出迎えてくれた。

「いらつしゃい。待ってたのよ。さっとうぞ上がって」

「君がユウ君？話はハルから聞いていたよ。ゆっくりしてって」

二人とも俺に厳しいとか冷たいとかそういうのはなかった。

寒かっただろうとか、わざわざ来てくれてありがとうとか……

ああこんな温かい場所でハルは生きていたんだって、お線香をあげている最中少し羨ましく思った。

「ハルはよく君のことを話していたんだ」

立ち上る湯気。お茶の香りに包まれて、ハルのお父さんは口を開いた。

俺と由美は黙って聞いている。

「その時の顔がね……何というか輝いていたんだ。本当に幸せそう
でね。」

そこで一旦言葉を切ってお茶を口に含む。
渋かったのか、僅かに顔をしかめた。

「それで、どうしても君に聞きたいんだ。君は……ユウ君は娘のこ
とをどう思っていたの？」

彼女のことを俺は……？

「……上手く言えないですけど……」

「構わないよ。長くなってもいい。どうしても聞きたいんだ。」

この時わかったんだ。

これはケジメ。父親として、娘の生前の環境を知るための。

俺は話した

ハルの笑顔に惹かれたこと

思い切って話しかけて、メルアドを聞いたこと

中々告白できずにいた自分に嫌気がさしたこと

やっと踏ん切りがついて告白した時、半分諦めていたこと

無事付き合うことになって、その日の夜は安心して眠れたこと

手を繋いで、一緒に帰った日々のこと

あの時食べたフライドポテトがたまらなく美味しかったこと

ケーキを頬張るハルの幸せそうな顔

誕生日に香水をもらったこと

一緒にいただけで楽しかったこと

一緒にいるだけで笑顔になれたこと

二人で過ごす時間を大切に思っていたこと

そして、ペアネックレスのこと。

俺は語る

溢れてくる。止まらない。まるで塞き止められた水が氾濫するよう
に。

何でだろう。彼女といった時間が、毎日が、どれほど幸せで貴重だっ
たか、たった今気づいた。

「君は……本当にハルのことを愛していたんだね」

ハルのお父さんは満足そうに呟いた。

ハルのお母さんは泣いていた。

由美の目にも光るものがある。

なあ、ハル。ハルのことをこんなにも思っている人達が、ここに
いるぞ。

もし……もし来世があるならば。また巡り逢い、俺は君に惹かれる
だろう。

そして言っただ

本気で君を愛していると。

引きずって

あれからもう2年が経つ。

高校を卒業して、俺は大学へ進学した。

そしていろんな人と出会い、様々なことを学んで、今の俺が存在する。

君のいない世界は今日も回り、何も無かったように朝を迎える
今までも、これからも。

何が言いたいかというと……君が生きていたらまた別の自分がある
ってこと。

君は言った

私のことは忘れて幸せになれと。

幸せとは凄いい曖昧なものだ。他人から見ると幸せそうに見えて、
そうじゃないこともある。

今、俺がヨシキや由美の前で見せている笑顔は幸福なのだろうか。

……本当に何言ってるんだろ。

やっぱりあの日が近づいてきたせいだろうか。

今日は12月21日。

あの日から2度目の冬の再来だ。

今年も逢いに行くよ。君のもとへ。

* * * * *

住み慣れた街を遠く離れて、福島へやって来た。

駅を出た途端、冷たい風が頬を撫でる。

寒さから身を守るように一度外しておいたマフラーを首に巻く。
どこかちぐはぐな、いかにも手編みなマフラーを。

これはハルの両親と会った日に、帰りにもらったものだ。
二人はハルからのクリスマスプレゼントと言って、俺に渡した。
聞くと毎晩夜遅くまで編んでいたらしい。

ここからは俺の予想だけど…… 12月24日を回った夜中に、ハル
はマフラーを完成させた。

ハルはその達成感から深く眠ってしまう
そして……寝坊して事故にあった。

その原因ともいえるマフラーを俺は身に着けている。
しかしハルの形見であることもまた事実だ。

偶然通りかかったタクシーに乗りこむと、マフラーを解いた。

しかし、きつとまた首に結びつけるだろう。形見として。

目的地を告げるとタクシーは動き出した。

窓越しに過ぎ行く街並みを、何の気無しに見送る。
流れていく風景。

福島は白虎隊が有名だと聞いたけど、とても観光に繰り出す気分じゃない。

それが出来たらどれだけ楽だろうか。

街はクリスマスカラーに包まれている。

それに染まることを身体が拒む。

いつかはそれも許せるようになるだろうか。

信号は赤になり、それに従ってタクシーは止まる。

すると目の前の横断歩道を少女が早足で横切った。

刺すような冷気にその頬を朱に染めて、手には紙袋。

一瞬、ハルと重なって見えた。

この娘にも、自分を待つ愛すべき人がいるのだろうか。

少女は何事も無く渡りきると、街の雑踏へ姿を消した。

「運転手さん」

「はい、なんでしょう」

運転手さんが応える。深く刻まれた皺と、澄んだ目が印象的だった。

「安全運転をお願いします」

「ああー今日はクリスマスですからね。わかりましたー」

鏡越しに向けられる笑顔。その柔らかい表情に俺は安心して、シートにもたれかかった。

信号が青に変わる。タクシーは穏やかなエンジンの音に包まれて、ゆっくりと走り出した。

* * * * *

騒音から少し離れた場所に、ハルは眠っている。

周りを林に囲まれた土地は、どこか神聖な世界に思えた。

その入り口に、俺は右手に花束を持って降り立った。

視界の隅々に映る、立ち並ぶ墓碑。

それには目も暮れず、入り組む道のさらに奥へと向かう。

去年は若干迷ってしまったが、今年はきちんと俺の足がナビをしてくれた。

その角を曲がれば、ハルはすぐそこにいる。

一年ぶりか……

「久しぶり、ハル」

足を止めて、微かに呟いた。
返事なんて無い。俺の独り言。

とりあえず右手に持った花束を飾った。

ハルの墓石には既に花が何本か添えられてある。

「また先を越されちゃったな」

おそらくはあの3人だろう。

今年は一番だと思っていたんだが。

その後、この一年のことをハルに話した。

大学はやっぱ忙しいとか、相変わらずコーヒーはダメだとか、あと……ヨシキに彼女が出来て上手くやっているらしい、とか。

一通りの近況報告を終えると、ポケットから細長い箱を取り出して、慎重に封を開ける。

今年はこれでおしまい。また来年、次こそ一番最初に。

「メリークリスマス」

ハートの片割れ——イルカのネックレスを、震える手でそっと供えた。

「すっごい似合ってるよ」

脳裏に浮かぶ君の笑顔。これもいつか朧げな記憶となり、写真を頼ることになるかもしれない。

だからせめて、毎年逢いに来るよ。何度も話しかけるよ。ハルのこと、絶対忘れないから。

「じゃあまた来年、クリスマスイヴに」

どれほど藻掻いて、何度叫べば君に想いは届くだろう。

静寂を破る音圧は一陣の風に運ばれて、遙か彼方へ消え去った。

引きずって（後書き）

こんな意味のわからない小説を読んでもさり、ありがとうございました
ましたm（――）m

そもそも小説と呼べるのか、作者自身でもわかりません（――）；

でもまあ、結果はどうであれ書き終えることができました。

思いつきから書き始めたので、正直挫折すると確信していたのは内
緒。

次回作は…多分書かないだろうなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2424b/>

遙か彼方

2010年10月17日01時46分発行